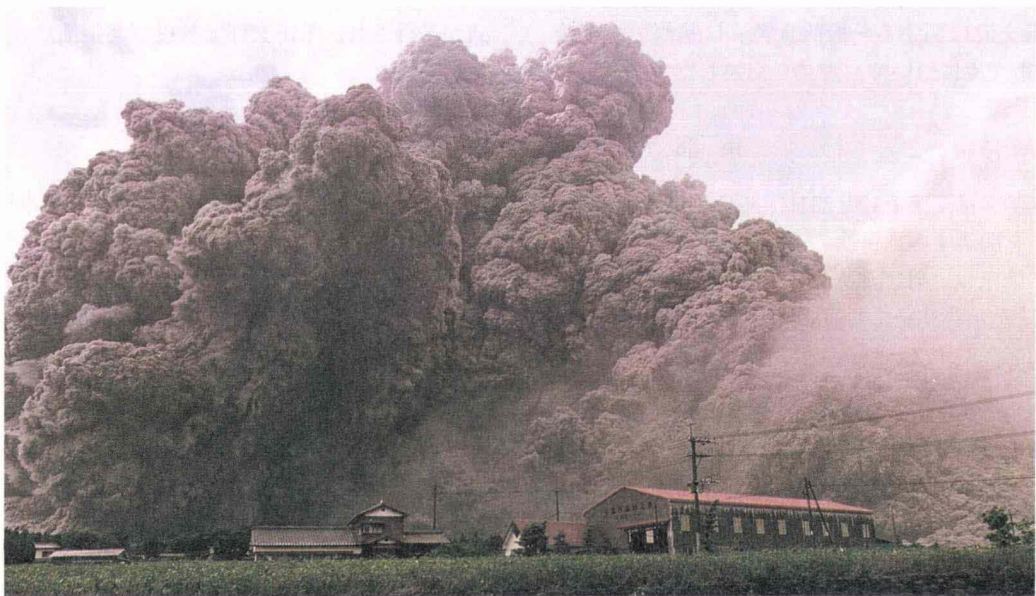


京大広報

No. 452

京都大学広報委員会



雲仙普賢岳の溶岩ドーム崩壊による火砕流 ー関連記事本文596ページー

目次

<大学の動き>

- 井村総長、アメリカ合衆国訪問……………588
- 名誉教授称号授与式……………588
- 京都大学市民講座の開講……………588
- 京都大学春秋講義（秋季講座）の開講……………589
- 部局長の交替等……………590

<部局の動き>

- 医療技術短期大学部説明会……………590
- 超高層電波研究センターが「京都大学電波科学
計算機実験装置（KDK）」を導入……………590

ー公開講座ー

- 工学部「人類の持続的発展と工学」……………591
- 医療技術短期大学部
「健康科学公開講座ーのびやかに生きるー」……………591
- 人文科学研究所「絵とうた…文化の現場を読む」……………592
- 農学部「農業簿記・農業経営講習会」……………592
- 理学部「現代数学展望」……………592

- 数理解析研究所「数学入門」……………593
- 農学部附属演習林「森のしくみと働き
ー芦生演習林への招待ー」……………593
- 防災研究所「生活と防災」……………593
- 霊長類研究所「霊長類の進化」……………594

<資料>

- 国立大学教官等の待遇改善に関する
国立大学協会の要望書……………594

<紹介>

- 防災研究所・桜島火山観測所……………596
- 計報……………598
- 日誌……………599
- 第32回国立七大学総合体育大会で本学が総合優勝……………601

<コラム>

- 地域研究の役割
東南アジア研究センター教授 高谷好一……………602

<大学の動き>

井村総長、アメリカ合衆国訪問

井村総長は、7月19日から、ブラウン大学との学術交流に関する打合せ及び日米医学協力委員会出席のためアメリカ合衆国へ出張し、7月25日帰国した。

ブラウン大学では、グレゴリアン学長その他関係教官と懇談し、同大学における高等教育、学術研究の現状及び平成4年4月に同大学と締結した「学術交流に関する一般的覚書」に基づいた今後の学術交流について、意見を交換した。

また、日米医学協力委員会への出席は外務省の依頼により医学関係分野の協議を行ったものであるが、この機会に医学分野を中心とした高等教育、学術研究の現状等について同委員会出席者と意見を交換した。

名誉教授称号授与式

7月13日(火)午前10時から、総長室において横山 陽葉学部長出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、米田文郎元教授(薬学部)に称号が授与された。

京 都 大 学 市 民 講 座 の 開 講

本学では、来る10月23日、30日、11月6日の各土曜日に広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を開講する。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、昭和54年以来毎年開かれているもので、今年度は、「かかわり」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる講義が行われる。

○受講定員 400名

○受講料 2,000円(全講義を通しての受講料です。)

- 申込方法 ① 往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入(返信はがきにも住所・氏名を記入)の上、9月30日(木)までに下記の申込み先へ申し込むこと。
 ② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。
 ③ なお、本講座を本学教職員並びに学生にも広く開放するため、50名の特別受講枠(無料)を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

○会場 法経第四教室

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛(内線2041, 2043)

講義日程

共通テーマ —かかわり—

開 講 日	テ ー マ	講 師
第1日 10月23日(土) 13:00~16:40	開講のあいさつ	総 長 井 村 裕 夫
	だれがコンピュータを開発したか? —機械と論理とのかかわり—	文 学 部 教 授 内 井 惣 七
	政治と行政とかかわり	法 学 研 究 科 教 授 村 松 岐 夫
第2日 10月30日(土) 13:00~16:30	かかわりの問題としての教育	総 合 人 間 学 部 助 教 授 岡 田 敬 司
	人と人とかかわり —医療従事者の立場から—	医 療 技 術 短 期 大 学 部 教 授 松 本 雅 彦
第3日 11月6日(土) 13:00~16:40	環境と貿易とかかわり —ECとNAFTA—	経 済 学 部 教 授 本 山 美 彦
	近代日本の「教養」 —日本人と「教養」のかかわり—	文 学 部 助 教 授 筒 井 清 忠
	開講のあいさつ	文 学 部 教 授 内 井 惣 七

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下に、下記のとおり「京都大学春秋講義（秋季講座）」を開講する。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ『自然と共生』

開講日	講 師	テ ー マ
10月18日	生態学研究センター長 川那部 浩 哉	地球共生系
10月25日	農 学 部 教 授 吉 田 博 宣	都市と森の共生
11月1日	総合人間学部教授 福 井 勝 義	焼畑・牧畜にみる自然との共生
11月8日	工 学 部 教 授 松 井 三 郎	環境にやさしい土木工学 —エコシビルエンジニアリングの展開—
11月15日	経 済 学 部 助 教 授 植 田 和 弘	人間と自然のための経済学
定 員	120名	
受 講 料	6,000円（全講義を通しての受講料です。）	

水曜講義

開講日	講 師	テ ー マ
10月20日	理 学 部 教 授 尾 池 和 夫	地震と活断層
10月27日	教 育 学 部 教 授 天 野 正 輝	日本の近代化と試験・評価
11月4日	薬 学 部 教 授 横 山 陽	からだの中のくすりの動き
11月10日	工 学 部 教 授 池 上 詢	自動車を取りまく環境・エネルギー問題
11月17日	文 学 部 教 授 礪 波 護	唐代の旅記
定 員	各講義 120名	
受 講 料	各講義 1,200円	

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○申込締切日 9月30日（木）

○申 込 方 法

① 月曜講義、水曜講義の別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を記入すること。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず記入すること。返信はがきにも住所・氏名を記入すること。

② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041, 2043）

部局長の交替等

学生部長

万波通彦工学部教授（量子物性学講座担当）が7月16日学生部長に再任された。任期は平成6年7月15日までである。

東南アジア研究センター所長

矢野 暢東南アジア研究センター所長の後任として坪内良博東南アジア研究センター教授（社会生態研究部門担当）が9月1日任命された。任期は平成8年8月31日までである。



<部局の動き>

医療技術短期大学部説明会

医療技術短期大学部では、7月21日（水）午後1時30分より5時まで、本短期大学部についての説明会を開催した。

説明会には高校生220名、高校進路指導教諭9名の参加者があった。

説明会では、まず大講堂において、参加者全員に本短期大学部の特色、入試概要、各学科の教育内容を、資料及びスライドを用いて説明した。次に参加者を6グループに分けて、約1時間学内施設見学を実施した。最後に、各学科ごとに個人相談を行い、参加者と教官との懇談の機会を設けた。また、学生生活や入試に関する一般的な相談にも応じた。

参加者の98.6%がアンケート調査に応じ、その内の96.3%よりこの説明会が参考になったとの回答を得た。

（医療技術短期大学部）

超高層電波研究センターが「京都大学電波科学計算機実験装置(KDK)」を導入

平成5年3月に全国共同利用設備として京都大学電波科学計算機実験装置(KDK)が超高層電波研究センターに設置された。このKDKは、宇宙プラズマ、超高層・中層大気中の電波現象や電波応用技術に関する計算機実験（数値シミュレーション）とその理論解析による研究の推進を目的とした専用計算機システムであり、主記憶2GBytesをもつ高速ベクトル演算装置、60GBytesの磁気ディスク容量をもつデータ解析装置、及びグラフィック出力装置から構成される。

このKDKの披露会が、6月29日（火）、学内外から関係者約70名の出席を得て、超高層電波研究センター会議室において挙行された。披露会は、午後1時から始まり、松本 紘超高層電波研究センター長の挨拶、文部省学術国際局研究機関課長の代理として酒井哲夫同課研究所第二係長、センター協議員の木村磐根工学部教授、全国共同利用者の代表として鶴飼正行愛媛大学工学部教授の祝辞、続いて大村善治センター助教授によるKDKの仕様説明の後、システムの披露及びデモンストレーションが行われ、午後2時に閉会した。

このKDKにより、全国共同利用施設大型計算機センターでは実行できない世界第一級の大規模計算機実験が可能になり、今後共同利用装置として、関連分野の研究者に広く活用されることが期待される。

（超高層電波研究センター）



—公開講座—

工 学 部
「人類の持続的発展と工学」

工学部では、一般市民を対象とし、第13回公開講座を6月12日から7月3日までの間、4回にわたり毎週土曜日の午後1時30分から午後5時まで近畿地方発明センターにおいて開催した。受講者は120名であった。

多様な内容をもつ工学が人類の持続的発展に貢献していることはいうまでもないが、これからの工学はそれぞれの専門分野での課題を追求するとともに、それが、人間、社会、あるいは地球全体にとってどういう意味を持ち、また影響を与えるかということを考えながら発展させてゆかねばならないという立場から、技術の根底にある種々の材料、環境保全の問題、日常生活を支える乗り物や情報などについてどのような考え方で研究が行われているかを解説した。

なお、講義題目・講師は次のとおりであった。

材料今昔

古代エジプト遺跡と地球環境の変化

谷 本 親 伯

複合効果—異種材料を組み合わせると—

落 合 庄治郎

過剰の時代を生きる

飽食時代を越えて—廃棄物処理の現場から—

高 月 紘

大規模データベースの世界

上 林 彌 彦

乗り物とエネルギー変換

電気自動車の現状と将来

安 陪 稔

航空宇宙における推進・エネルギー変換

森 岡 茂 樹

生体にやさしい材料

体を修復するセラミックス

小久保 正

人工関節—工学を応用する医療技術—

池 内 健

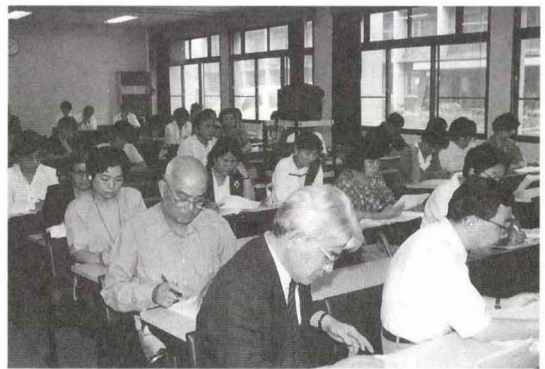
(工学部)

医療技術短期大学部

「健康科学公開講座 —のびやかに生きる—」

医療技術短期大学部は、一般市民を対象に、第6回健康科学公開講座を7月3日から24日までの毎週土曜日午後、4回にわたり同短期大学部講義室において開催した。

本年度は「のびやかに生きる」をテーマに、社会が高度化・複雑化している現在、私たちは多かれ少なかれ常にいろんな精神的・身体的ストレスを受けながらの生活を余儀なくされているが、このような環境の中で「のびやかに生きる」にはどうしたらよいかを、下記の題目についてそれぞれの講師が専門分野の立場から講義した。



講座は、井村裕夫学長の開講のことばに始まり、毎回の講義では活発な質疑応答がなされ、最終回の講義のあと上羽康夫部長の公開講座のまとめと謝辞で閉講した。

今回の公開講座の出席者は39名であった。

のびやかに生きようとした女性

—ジェイン・エア— 加 茂 映 子

学校でのびやかに生きるために

—不登校について考える— 菅 佐和子

呼吸器疾患とともに生きる 鈴 木 康 三

高齢化社会をのびやかに生きる

伊 藤 好 美

健康のためのスポーツ 川 井 浩

身体障害者スポーツ 森 永 敏 博

歯の健康と幸福 谷 嘉 明

ブレインウォッチング

—あなたは脳をどこまで知っていますか—

野 村 巖

(医療技術短期大学部)

人 文 学 科 研 究 所

「絵とうた…文化の現場を読む」

人文科学研究所では、夏期公開講座を7月9日(金)及び10日(土)の2日間、午後1時30分から午後5時まで本研究所本館大会議室において開催した。

1949年以来44回目を迎えた本年の講座は、「絵とうた…文化の現場を読む」を共通テーマとし、連日100名を超える受講者があった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

歌い手たちの変貌

—能の「コロス」とその意味づけ—

藤 田 隆 則

聖歌から聖音へ

—古代インド宗教歌詠の思想性—

藤 井 正 人

詩のことは—リュートからイメージへ—

宇 佐 美 齊

漢代画像石墓の世界

曾 布 川 寛

仏像の出現

—それは大乘経典にかかわらないか—

荒 牧 典 俊

天皇の図像—錦絵から御真影へ—

佐 々 木 克

(人文科学研究所)

農学部「農業簿記・農業経営講習会」

農学部附属農業簿記研究施設では、恒例の夏期公開講座「農業簿記・農業経営講習会」を、7月18日(日)から23日(金)までの6日間、午前9時から午後5時まで農学部講義室において開催した。

本講習会は本年度で57回目を数える伝統的講習会であって、日頃、農村及び農家の経営指導に従事する人達に研修の機会を提供するものである。今年も、農業改良普及員、農業協同組合関係職員、農林行政関係職員、高校教員、その他団体職員など、全国各地から80余名が参加して行われた。

講義科目及び講師は次のとおりであった。

自立家族経営の発展・合理化のための

「農家経済簿記」：原理と実務

稲本 志良・辻井 博・小田 滋晃

企業的経営の発展・合理化のための

「農業経営複式簿記」：原理と実務

稲本 志良・小田 滋晃

農業経営・地域革新のための農業投資

および資金の計画・管理・分析

亀谷 昶・辻井 博

地域農業および農業経営の分析・診断・計画

熊谷 宏・加賀爪 優・宇佐見晃一

(農学部)

理 学 部

「現代数学展望」

理学部数学教室では、8月2日(月)から6日(金)までの5日間、標記の公開講座を本教室講義室において開催した。

この公開講座は、数学教育関係者をはじめ現代数学に興味ある大学生、高校生を対象に、いくつかの話題を選び、数学の最近の発展について講義し、今後の展望を示唆することを目的としている。

15年目の今年は、各地から64名にのぼる多くの受講者があった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

2次元、3次元の群と幾何

齋 藤 政 彦

力学系と数値計算

西 田 孝 明

シンメトリー

加 藤 信 一

(理学部)

数理解析研究所

「数学入門」

数理解析研究所では、8月3日(火)から6日(金)までの間、午前11時から午後5時まで数理解析研究所4階大講演室において、公開講座「数学入門」を開催した。

この公開講座は、社会人、中・高校教師、学生等を対象に、専門的題材をわかりやすく解説するものであり、62名が受講した。

講義題目、講師は次のとおりであった。

組紐群について	織 田 孝 幸
論理とコンピュータ	服 部 隆 志
渦運動と乱流	大木谷 耕 司

(数理解析研究所)



農学部附属演習林

「森のしくみと働き—芦生演習林への招待—」

農学部附属演習林では、8月5日(木)から7日(土)までの3日間芦生演習林(京都府北桑田郡美山町芦生)において公開講座「森のしくみと働き—芦生演習林への招待—」を開催した。

この講座は、一般市民を対象として、芦生の自然と森林についての解説と、森林を構成する樹木の分類法とその実習など、森林自然を理解するための基礎的知識から森林のもつ資源生産、公益的機能までを解説するもので、今回は3回目として特に樹木、流水量の測定実習と森林を支える土壌構造の解説を加えた。

講座の第1日は講義にあて、第2日は森林内での実習、第3日は3テーマに沿っての解説と実習を行い、47名が受講した。

それぞれのテーマ及び担当者は次のとおりである。

芦生の自然について	
芦生の自然	大 島 誠 一
芦生の歴史	枚 田 邦 宏
ササの話	柴 田 昌 三
森林の働き	安 藤 信

樹木の識別

山 中 典 和

天然林内での実習

川那辺 三 郎

ほか7名の教官

森林を調べる

木を測る

金 子 隆 之

枚 田 邦 宏

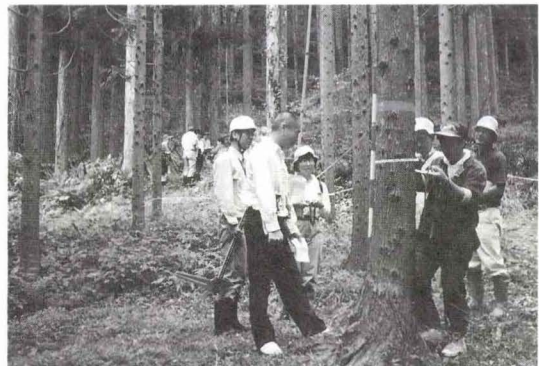
水を量る

中 島 皇

土を調べる

上 田 晋之助

(農学部附属演習林)



防災研究所

「生活と防災」

防災研究所は、8月25日(水)と26日(木)の両日午前9時30分から午後5時まで、大阪市西区の建設交流館において京都大学防災研究所公開講座「生活と防災」を開催し、139名が受講した。

この講座では、一般市民を対象として、自然災害の発生とその対策についての基礎的知識から最新の研究成果までを解説した昨年度までの講座をより深く掘り下げ、生活に密着した視点から、自然災害を科学的に見る目、災害への備え、その具体的方法について講義した。第1日目は総説及び台風災害をテーマとした3講義、第2日目は地震をテーマとした3講義を行った。各日とも講義終了後活発な質疑応答がなされるとともに、第1日目にはNHKの取材もあり、社会的関心の高さがうかがわれた。

それぞれの講義題目と講師は次のとおりであった。

総説 安全な社会を目指して 亀 田 弘 行

日本人の生活と台風

—予報と防災対策— 光 田 寧
水害のない住みよい街に

—都市環境と内水対策— 岡 太 郎
災害をうまくのりきるために

—人間行動と情報のかかわり—
林 春 男

北海道地震は近い？

—地震予知の現状— 安 藤 雅 孝
あなたの家は安全か

—素人耐震安全点検学— 六 車 熙
コミュニティー自らが行う防災

—リスクマネジメント事始め—
岡 田 憲 夫
(防災研究所)

霊長類研究所

「霊長類の進化」

霊長類研究所では、8月26日(木)・27日(金)の両日にわたって愛知県犬山市の本研究所会議室において公開講座を開催した。今年は第9回目である。

参加者は、小・中・高校教員、会社員、主婦、学生と幅広い。参加者数は71名で、中部、近畿、中国地方からの参加が多かった。

今回は、霊長類の特徴を形態学、社会生態学、神経生理学、分子生物学の観点から取り上げ、各々の立場から進化に対する意見を述べた。また、受講者全員が実習を受け、研究の現状を少しでも理解できるよう配慮した。

講義・実習題目と講師は次のとおりである。

総合司会	平 井 啓 久
二足歩行の起源	木 村 賛
類人猿の社会進化	山 極 寿 一
脳の進化	澤 口 俊 之
霊長類と DNA	竹 中 修
形態、骨学実習	高 井 正 成
心理学実習	松 沢 哲 郎
サルの野外行動観察実習	加 納 隆 至
遺伝学実習	庄 武 孝 義
	(霊長類研究所)

<資料>

国立大学教官等の待遇改善に関する 国立大学協会の要望書

国立大学協会第92回総会において、国立大学教官等の待遇改善に関する要望が決議され、下記要望書が文部大臣及び人事院総裁等に提出された。

平成5年7月1日

国立大学協会会長
吉 川 弘 之

国立大学教官等の待遇改善に関する要望書

国立大学教官等の給与等の待遇改善については、人事院をはじめ関係機関の特段の配慮を得て改善がなされてきたところであり、そのことについては、関係各位のご努力に対して深く感謝する次第であります。

いうまでもなく、近年、教育改革の問題が焦眉の国家的課題とされ、大学についても、教育・研究の充実整備が課題となっていることは周知の事実であります。この課題に応えるうえで、まず何よりも大学自身がその教育・研究体制の改革に取り組むことが必要であり、現在、多くの国立大学が自己点検・自己評価を計画・実施し、それを自らの大学の改革と活性化の契機とすべく努力しているところであります。

それとともに、大学の質的向上を図るには、その担い手である大学教官等に有為な人材を確保することが基本的な前提条件であり、それを充たすためには大学教官等の待遇改善が一つの必須要件であります。

しかしながら、それはいまだ十分であるとは言い難い状況にありますので、さらに以下の諸点につき特段の措置を講ぜられますよう、ここに重ねて強く要望する次第であります。

記

1. 教育職(-)の俸給水準の引上げを行う等を含め俸給体系を是正すること。

大学は高等教育および学術研究を推進・発展させる中心の存在として社会の付託に応じて、その任務を果たしている。科学技術の著しい進展と国際化の時代にあつて、その責務は益々増大しているところである。そのときにあつて、大学の教学の中心の担い手は大学教官であり、教育・研究について絶えざる情熱と高い能力を有する優れた人材を擁することは大学の根本であることに鑑み、その俸給をその職務と責任に見合

う水準に引き上げるよう特段の配慮を強く要望する。特に近年、国立大学の教官の給与水準が民間企業研究所や私立大学のそれを大幅に下回っている実態が人材確保の障害の要因ともなっていることに配慮しその急なる改善が待たれる。

また、あわせて助手について高校教諭の給与を下回る実態や教務職員の給与の頭打ち等の問題があり、これら職員の格差是正を図る。

なお、以上の俸給水準の引上げと同時に中堅教官について早期に最高俸俵に到達するよう改善するとともに、現行の昇給延伸制度についても、教官の職の高学歴による高年齢就職等による特殊性に着目してその年齢の引上げを図る。

2. 部局長（副学長、学生部長、事務局長等を含む。）について指定職の完全適用を図ること。

部局長等及び教育、研究の功績顕著な教授に対する指定職の適用拡大については改善が図られつつあるが、しかしながら、まだ十分な状況とはいえない。

指定職制度は、特定の職務就任を条件に適用するのが本来の趣旨であることを踏まえ、部局長等については、その在任期間中はすべて指定職俸給表が適用できるよう措置する。

また、特に教育、研究の功績顕著な教授に対して指定職俸給表の適用をさらに拡大する。

3. 管理職手当の適用対象の拡大と増額を図ること。

近年、大学における管理運営の職責が益々重くなりつつある実情に鑑み、学科長、全学段階の委員等の学内教育行政の要職にある者について、管理職手当支給の途を開くよう配慮する。

特に、学科長については、このたび法令上の職として位置付けられたことを踏まえ、早期に措置する。

なお、部局長について指定職の完全適用を前項で要望しているところであるが、指定職が適用されるまでの間、引き続きその増額を図る。

4. 大学教官特有な職務に見合う手当として「大学研究調整額」（仮称）を新設すること。

大学教官は、高度の専門教育を行うばかりでなく、進展極まりない学術の研究について一定の業績を常に要請される。そのため、各種学会活動や独自の情報の収集等多様な教育・研究活動を遂行することが必須となっている。

しかしながら、このような多様な教育・研究活動に際して、自費から支出する研究費が少なくないことが、当協会財政基盤調査研究委員会が行った全国調査結果により明らかになっている。

この特別な経費負担に対する措置として「大学研究調整額」（仮称）の新設を図る。

なお、職務の特殊性に基づきすでに支給されているものとして、義務教育教員には「教職調整額」、医療職（一）職員には「初任給調整手当」がある。

5. 教育・研究支援職員等の待遇の抜本的改善を図ること。

当国立大学協会は、かねてより大学特有の専門職である技術職員等の教育・研究支援職員の抜本的な待遇改善を要望し、「専門行政職俸給表」の適用を切望してきたが、これら職員の現状が同俸給表を適用できる状況に置かれていないとして、その適用が見送られてきたところである。

大学における教育・研究支援職員の教育・研究に果たす役割は大きく、かつ不可欠なものであり、俸給表の種類にかかわらず、これら職員の俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう措置する。

当協会としても、教育・研究支援職員の在り方について、先に、各国立大学に対し、教室系技術職員の組織化および研修等についてその実現方を要請し、現在までに職員規模で相当数が組織化され、また、多くの大学において多様な研修が行なわれている。「専門行政職俸給表」への移行のための条件の整備を踏まえて、早期かつ円滑にそれが実現されるように努力されたい。

6. 大学の中堅職員（事務系）の待遇改善を図ること。

大学においては、事務長、補佐、係長等の定数が固定化されており、豊富な職務経験、職務遂行能力を持つ適任者でありながら、昇任・昇格が限定されるために俸給の上で格差を生じている。このことは、大学の中堅職員等に職務遂行意欲を欠くこととなり、ひいては大学運営の業務に重大な影響を及ぼす結果となりかねない。

また、特に近年教育研究の国際化に伴う国際学術交流や留学生受入れ、大学院の整備充実、教育研究システムの多様化、複雑化への対応等高度の専門性を要する新たな業務が激増している。

よって、引き続き専門職員制度を一層拡大するとともに上位の級別定数について特段の措置を図る。

7. 看護職員の待遇改善を図ること。

医学・医療の進展に寄与する診療、教育、研究の場であることを使命とする大学病院において看護職員に課せられた任務は極めて高度化、専門化しており、その役割は重要なものとなっている。

しかしながら、近年、特に看護職員に優れた人材を確保することが困難な状況となっている。

また、この状況は大学病院に限った問題ではなく、このため昨年には看護婦等の待遇改善等を目的として看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定された。

看護力の強化は、大学病院の運営にとって不可欠の課題であり、初任給を含む給与水準の引き上げを図る。

また、看護職員の勤務形態の特殊性等に配慮し、勤務環境の改善を図る。



<紹介>

防災研究所・桜島火山観測所

—桜島の噴火予知研究の現状—

昭和35年に防災研究所附属の施設として桜島火山観測所の設置が認められ、昭和49年からの火山噴火予知計画に従って観測研究設備の整備が進められてきた。今年度は平成元年からの第4次5ヶ年計画の最終年度にあたる。観測所設立及び第1次火山噴火予知計画については、『京大広報』No. 165 (1978.10.15) で紹介した。また、第3次火山噴火予知計画からは、噴火の前兆を捉え、桜島の噴火の予知の実用化をめざした観測の充実が図られてきた。観測坑道に設置した傾斜計・伸縮計によって噴火の数十分ないし数時間前から山体表面が山頂火口付近を中心にごくわずか(1mm未満)隆起膨張する現象が捉えられるようになり、山頂噴火の直前予知システムが確立された(『京大広報』No. 343, 1987.12.15)。現在では、観測所職員にとって「寝耳に水」という噴火はほとんど皆無である。顕著な噴火の直前予測の確率は90%以上である。

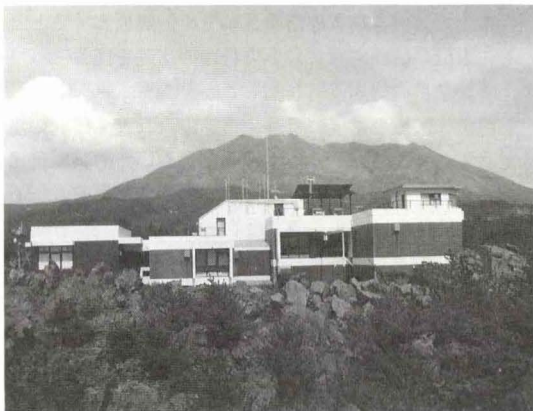
これまでの観測研究から桜島の地下のマグマの供給系の実態とマグマの動態がかなり具体的に捉えられるようになった。地盤変動の測定及び地震観測から、桜島の火山活動に関わるマグマ溜りは

桜島の北側に広がる錦江湾(始良カルデラ)の中心部地下約10kmと桜島の地下約4kmにあると考えられる(図参照)。静穏期には、マグマの蓄積によってカルデラの地盤が年間1千万立方メートルの割合で隆起膨張する。大正3年のような大規模な山腹噴火が発生し火山物質を放出すると桜島とその周辺は急激に沈降する。このような供給・蓄積と放出の関係から推定される深部からのマグマの供給率は年間1千万立方メートルである。実際、最近約20年間のように、山頂から火山灰を年間1千万立方メートルの割合で放出する活動期間には地盤の隆起が停滞する。マグマの蓄積状態は水準測量や鹿児島湾の潮位観測によって把握されていて、長期予測が可能となる。なお、前述の噴火前の山頂部の微小な隆起は桜島直下のマグマ溜りへマグマが注入された結果生じると考えられる。また、桜島南西部から桜島へ向けても一時的にマグマが供給される経路があることが地震活動や温泉ガスの研究から推定されている(図参照)。

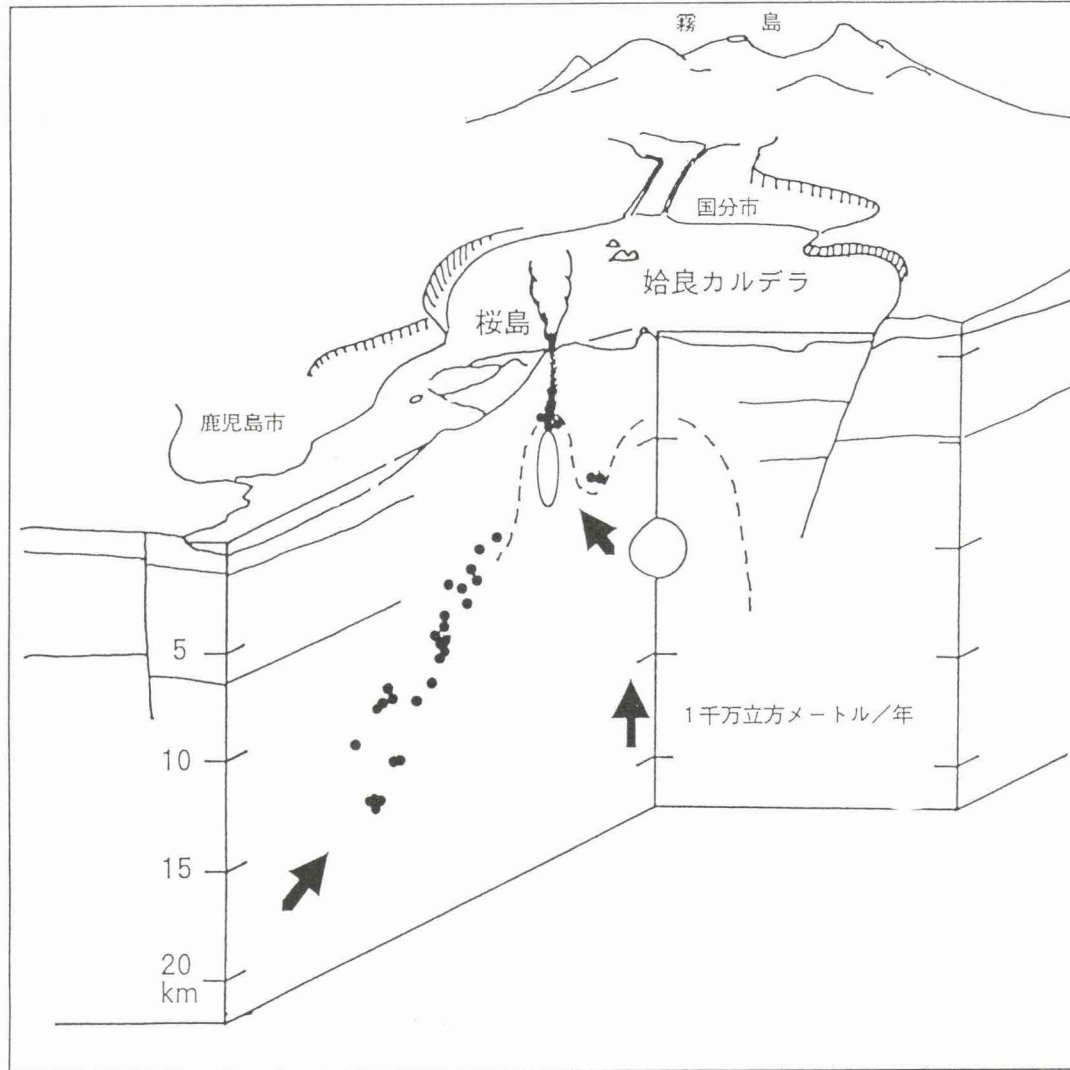
観測井を用いた精密地震観測による震源分布から、桜島の直下のマグマ溜りから山頂火口へは半径約200m、長さ約4kmの火道が連なっていることが分かった。その中では、マグマの貫入、上昇噴出、マグマの発泡、爆発的噴火などの現象に対応してそれぞれ特徴的な火山性地震や微動が発生する。一方、火道周辺の岩盤では通常の地震と同じく、岩石の破壊によって生じる地震が発生する。

桜島では、地下数kmまでのマグマの挙動は観測データによってほぼ捉えることができ、噴火予知実用化の段階になってきた。平成4、5年度には地震、地殻変動データの即時処理を行い、噴火の直前及び短期予測の実現をめざした火山活動総合判定装置を導入した。現在、システムの開発及び改良を行っている。また、パソコンによる準リアルタイムテレメータ装置を開発し、霧島火山帯の活火山及び深部活動の研究に着手した。

活発な活動が続く桜島は、火山噴火予知研究の最良の実験フィールドである。それ故に、観測設備の整備と国内外の研究者との共同研究が進展し、短期間の内に他の火山では例を見ないほど著しい成果が得られた。しかし、桜島の火山像や噴



桜島のマグマ供給系と噴火の前駆現象



[桜島の推定地下構造]

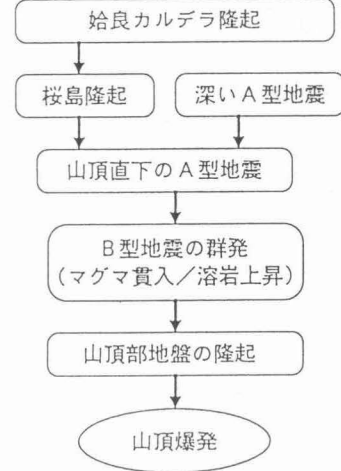
- ⋯⋯ 地震波の減衰域
- 火山性地震の震源

(マグマだまり)

- 桜島の地盤の変形と地震の空白域から
- 始良カルデラの地面の変形から

↑ マグマの上昇

[山頂噴火の前兆現象]



火予知手法が他の火山にも適用できる保証は必ずしもないかもしれない。また、地球化学や岩石学等も併せた多角的な研究により総合的な桜島の火山像を構築する必要がある。平成6年度からの第5次火山噴火予知計画では、このような問題意識のもとに、①霧島火山帯に属する4つの活火山の噴火予知研究、②桜島での地球化学的・電磁気学的観測研究の強化、③火山体構造探査（全国共同研究）、④国際共同研究の推進を図る。平成5年7月2日には防災研究所とインドネシア鉱山エネルギー省鉱物資源総局との噴火機構と火山活動の共同研究に関する協定が成立した。その中にはメラピ火山の噴火機構の研究も含まれている。同火山は、雲仙普賢岳と同様に溶岩ドーム崩落による火砕流発生を繰り返しており、この共同研究の成果はわが国の火山噴火予知及び火山災害予測研究にも貢献するものと期待される。

(防災研究所)

表紙写真説明

雲仙普賢岳の溶岩ドーム崩壊による火砕流（平成3年6月3日16時すぎ）。この火砕流は流走距離約4.3kmで島原市北上木場地区に達し、死者・行方不明者43名、家屋170棟余の被害を与えた。手前の家屋は深江町大野木場名。

—京大観測班（理・火山研究施設、防災研・桜島火山観測所）撮影—

計 報

藤原元始 名誉教授

本学名誉教授 藤原元始 先生は、7月13日逝去された。享年66。

先生は、昭和24年京都大学附属医学専門部を卒業、医学部助手、助教授を歴任の後、同44年4月医学部教授に就任され、薬理学第一講座を担当、平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和55年8月1日から同56年10月16日まで本学学生部長、同61年4月1日から平成2年3月31日まで本学放射性同位元素総合センター長

を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、平成2年4月武庫川女子大学薬学部教授に就任され、大学の運営と発展に尽力された。

先生は、薬理学の領域において数多くの顕著な業績を挙げられ、原著論文は400篇にも及んでいる。

特に、生化学的、電気生理学的手法を用いて心血管及び平滑筋の自律神経調節における生理活性物質の役割とその作用機構の解明に力を注がれ、カテコラミンの陽性変時作用の機構解明や新しい強心物質ゴニオポラトキシンをサンゴより発見されたほか、脳血管の各種アゴニストによる収縮反応を解析し、これが血管内皮より産生遊離されるトロンボキサンによることを明らかにされた。この研究は、内皮由来血管収縮物質という新しい概念を樹立し、その病態学的意義を明らかにしたものとして国際的に高く評価されている。これらの業績によって、平成3年度の第35回京都新聞文化賞を受賞された。

一方、第33回日本自律神経学会会長、第57回日本薬理学会会長、第8回日本眼薬理学会会長等を歴任されるとともに、永年、日本薬理学会役員、特に編集委員長として薬理学雑誌の国際的発展に寄与される等、薬理学会及び関連学会の運営、育成並びに発展に貢献された。また、昭和60年7月より日本学術会議会員、薬理学研究連絡委員会委員長、毒科学研究連絡委員会委員としてわが国のライフサイエンスの振興と科学政策の確立並びに国際交流の促進など、学術の発展に寄与された。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部)

永井秀夫 名誉教授

本学名誉教授 永井秀夫 先生は、7月29日逝去された。享年90。

先生は、昭和3年京都帝国大学医学部を卒業、医学部副手、助手、講師を経て、同19年9月大阪市立医学専門学校講師、同校教授を歴任され、同23年5月大阪市立医科大学教授、同26年8月本学

医学部教授に就任され、小児科学講座を担当、同41年停年により退官され、同49年6月京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、昭和29年10月から同33年10月まで、及び同34年12月から同41年3月まで本学結核研究所教授に併任され、同29年10月から同33年10月まで同研究所長、同29年10月から同31年10月まで本学評議員を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、同志社女子大学家政学部教授として私学の発展にも尽力された。

先生は、日本の小児科学の最高権威の一人として活躍され、特にアトピー性疾患、感染症、感染アレルギーなどの病因と病態の解明に努められ、基礎的及び臨床的研究において多大な功績を残された。とりわけ、補体第二経路の発見に先駆的な役割を果たされた。

また、日本小児科学会をはじめ主要な学会の理事または評議員として企画運営、発展に尽力され、昭和29年5月から同30年4月まで日本小児科学会学術集會会頭、同39年10月から同40年11月まで日本小児保健学会会頭を歴任され、小児科学の進歩と小児保健の進歩・普及に寄与された。

一方、医学の国際交流にも意をそそがれ、昭和44年8月に開催の第6回国際化学療法学会の副会長として世界と日本のそれぞれの学会の交流の促進に寄与された。

これらの功績により、昭和48年4月勲二等瑞宝章が授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部)

三浦 泰藏 名誉教授

本学名誉教授 三浦泰藏 先生は、8月14日逝去された。享年65。

先生は、昭和28年3月京都大学理学部動物学科を卒業、本学大学院理学研究科修士課程を経て、農林省淡水区水産研究所に勤務、その後、カナダ国ブリテッシュ・コロンビア大学大学院博士課程修了(Ph.D.取得)、昭和37年11月本学理学部助

手、同43年3月助教授、平成3年4月本学生態学研究センター教授となり、同4年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、長年にわたって本学理学部附属大津臨湖実験所に勤務され、学生の教育・研究指導にあたるかたわら、日本陸水学会の評議員として学会の発展にも貢献された。

先生の専門は、淡水魚類の生態学で、ゲンゴロウブナやアユの個体群動態、ビワマスとの生産と摂食速度、溪流魚イワナの個体群動態の構造と生産など、主に琵琶湖や溪流の魚類の生態学で顕著な業績をあげるとともに、湖の栄養塩循環における水生植物や無脊椎動物の役割についても研究をすすめられた。また、昭和56年以降は、中国の陸水生態学者との共同研究を積極的に進め、中国・東湖におけるハクレン・コクレンを中心とした生物群集の生産力の解明に多大の業績を残された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(生態学研究センター)

小川 環樹 名誉教授

本学名誉教授 小川環樹 先生は、8月31日逝去された。享年82。

先生は、昭和7年京都帝国大学文学部を卒業、東北帝国大学法文学部講師、助教授、教授を経て、昭和25年7月京都大学文学部教授に就任、中国語学中国文学第二講座を担当された。昭和49年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。その間、昭和43年8月から44年9月まで、評議員として大学行政に尽力された。退官後は、昭和57年まで京都産業大学外国語学部教授を務められた。学界においては、昭和44年度から45年度にかけて日本中国学会理事長を務められたほか、長く同学会理事、評議員、専門委員や東方学会理事等を歴任された。

先生の研究は、中国語学、中国文学の双方にわたっており、語学と文学の造詣が緊密に結びついて、研究の精度をきわめて高いものになっている。語学方面の業績は、音韻史を中心に多方面にひろ

がっており、伝統的な清朝小学の基礎の上にヨーロッパ言語学的方法を取り入れて、新しい語学研究のありかたを確立された。文学における業績は、小説史と詩文の分野からなり、前者にあっては人物像の形成や文体に関して多角的に小説の発展過程を明らかにされ、後者にあっては唐宋の詩を中心に表現技法や詩語の分析について、多くの斬新な見解を提起された。著書に『中国語学研

究』、『中国小説史の研究』、『風と雲』、『唐詩概説』などがある。また『蘇東坡詩集』など、詩の訳注も数多い。

これら一連の研究活動上の多大な貢献に対して、昭和58年勲二等瑞宝章が授与された。また平成元年には日本学士院会員に選ばれた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学部)

日 誌

(1993年6月1日～8月31日)

- | | | | |
|------|--|---------|--|
| 6月1日 | 防火委員会 | 9日 | 環境保全委員会 |
| ク | 連合王国イースト・アングリア大学 John Gareth Miller 副学長他1名来学、総長と懇談 | ク | 人文科学研究所夏期公開講座「絵とうた…文化の現場を読む」(10日まで) |
| 7日 | 英国図書館研究開発部諮問委員会及び図書館情報サービス評議会 Sir Peter Swinnerton-Dyer 議長来学、総長と懇談 | 13日 | 名誉教授称号授与式 |
| 8日 | 大学院審議会 | ク | 平成5年度京都大学技術職員研修(第10回)(15日まで) |
| 12日 | 工学部公開講座「人類の持続的発展と工学」(以後、19日、26日、7月3日) | 14日 | クロアチア共和国ザグレブ大学 Marijan Šunjić 学長来学、総長と懇談 |
| 16日 | 国際交流委員会 | 16日 | 放射性同位元素等管理委員会 |
| ク | 国際交流会館委員会 | 18日 | 農学部公開講座「農業簿記・農業経営講習会」(23日まで) |
| 17日 | 創立記念行事(音楽会) | 19日～25日 | 総長、ブラウン大学との学術交流に関する打合せのためアメリカ合衆国を訪問 |
| ク | トルコ共和国アクアニツ大学 Tuncer Karpuzoglu 学長他1名来学、総長と懇談 | 28日 | 附属図書館商議会 |
| 18日 | 創立96周年記念式典 | 29日 | 学位授与式 |
| ク | 名誉教授懇談会 | 8月2日 | 理学部公開講座「現代数学展望」(6日まで) |
| 22日 | 評議会 | 3日 | 数理解析研究所公開講座「数学入門」(6日まで) |
| 23日 | 同和問題委員会 | 5日 | 農学部附属演習林公開講座「森のしくみと働き—芦生演習林への招待」(以後、6日、7日) |
| 25日 | 組換えDNA実験安全委員会 | 25日 | 防災研究所公開講座「生活と防災」(26日まで) |
| 28日 | 総長、大学院生協議会と会見 | 26日 | 霊長類研究所公開講座「霊長類の進化」(27日まで) |
| 29日 | 平成5年度京都大学中堅職員研修(第9回)(7月2日まで) | 31日 | 平成5年度京都大学職員研修語学研修(英語中級コース)第1日(12月14日まで毎週火・金曜日 総60時間) |
| 7月3日 | 医療技術短期大学部健康科学公開講座「のびやかに生きる」(以後、10日、17日、24日) | | |
| 5日 | インドネシア共和国鉱山エネルギー省地質鉱物資源局 Ajat Sudradjat 総局長来学、総長と懇談 | | |

第32回国立七大学総合体育大会で本学が総合優勝

第32回国立七大学総合体育大会は本学主管の下、6月25日（金）から8月7日（土）までの間（アイスホッケー、航空、馬術は期間外に開催済）、各大学の選手及び関係者多数を迎えて開催され、男子23種目、女子9種目に熱戦が展開された。

本学選手の活躍は目覚ましく、空手道、水泳、ハンドボール、弓道（男子）、バスケットボール（男子）、ヨット、体操、洋弓で種目優勝したのをはじめ、その他多くの種目においても上位の成績を挙げた。

この結果、第2位名古屋大学に21点差を付け、見事に前回主管の昭和61年以来7年ぶりの総合優勝（通算8度目）を果たした。

なお、各大学の種目別成績は別表のとおりである。

（学生部）

競技種目	北大		東北大		東大		名大		阪大		九大		京大		
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
アイスホッケー	4	4	1	10	2	8	5	3	3	6	6	2	7	1	
航空馬術	7	1	2	8	5	3	1	10	3	6	6	2	4	4	
硬式野球	6	2	5	3	1	10	4	4	2	8	7	1	3	6	
柔道	3	5	5	2.5	—	—	2	8	5	2.5	1	10	3	5	
準硬式野球	5	3	2	8	7	1	6	2	3	6	1	10	4	4	
剣道	男子	3	6	5	3	6	2	7	1	4	4	1	10	2	8
	女子	4	4	7	1	6	2	5	3	1	10	2	8	3	6
少林寺拳法	男子	3	6	7	1	6	2	2	8	1	10	4	4	5	3
	女子	7	1	6	2	5	3	4	4	1	10	2	8	3	6
ソフトテニス	男子	7	1	2	8	5	3	1	10	3	6	6	2	4	4
	女子	7	1	2	8	5	3	1	10	3	6	6	2	4	4
硬式テニス	男子	5	3	7	1	2	8	6	2	1	10	4	4	3	6
	女子	4	4	5	3	1	10	3	6	2	8	7	1	6	2
バレーボール	男子	7	1	1	10	4	4	6	2	5	3	2	8	3	6
	女子	5	3	4	4	6	2	1	10	7	1	2	8	3	6
空手道	2	8	3	6	5	3	7	1	4	4	6	2	1	10	
水泳	6	2	3	6	5	3	4	4	7	1	2	8	1	10	
ハンドボール	2	8	3	6	5	3	4	4	7	1	6	2	1	10	
弓道	男子	4	4	5	3	3	6	7	1	6	2	2	8	1	10
	女子	3	6	5	3	1	10	6	2	7	1	2	8	4	4
フィールドホッケー	4	2	—	—	2	4	—	—	1	6	5	1	3	3	
バスケットボール	男子	5	3	6	2	4	4	2	8	3	6	7	1	1	10
	女子	3	6	5	3	2	8	1	10	7	1	6	2	4	4
自動車	7	1	2	7	6	2	1	10	4	4	5	3	2	7	
ヨット	5	3	6	2	3	6	7	1	4	4	2	8	1	10	
バドミントン	男子	2	8	1	10	3	6	7	1	6	2	5	3	4	4
	女子	1	10	6	2	7	1	2	8	5	3	3	6	4	4
体操	4	4	6	2	3	6	2	8	5	3	7	1	1	10	
陸上競技	男子	2	8	5	3	1	10	4	4	3	6	7	1	6	2
	女子	1	10	5	3	3	6	4	4	2	8	7	1	6	2
洋弓	4	3	5	2	2	6	—	—	3	4	6	1	1	8	
ゴルフ（男子）	6	2	4	4	3	6	1	10	7	1	5	3	2	8	
フェンシング	5	2	1	8	4	3	—	—	2	6	6	1	3	4	
卓球	男子	4	4	5	3	2	8	1	10	6	2	3	6	7	1
	女子	6	2	5	3	7	1	1	10	4	4	2	8	3	6
総合	7	142.0	6	145.5	3	166.0	2	177.0	4	159.5	5	153.0	1	198.0	

